

「書物と装飾 (3)」

研究年度・期間：平成 24 年度

研究ディレクター：長谷川 郁夫
(文芸学科 教授)

共同研究者：山 縣 熙 籾 亨 田中 敏雄 豊原 正智 出口 逸平
(文芸学科 教授) (教養課程 教授) (教養課程 教授) (芸術計画学科 教授) (文芸学科 教授)

学外共同研究者：高麗 隆彦 瀧本 雅志 福江 泰太
(東京造形大学 教授) (岡山県立大学デザ
イン学科 准教授) (文芸学科 非常勤講師)

書物と装飾芸術の関係については、これまで東西の哲学者や文学者や装傾家などによって、書物のすぐれた精神性に対峙する美しい物質性の視座からさまざまに論じられている。19世紀末に量産による粗悪な書物の氾濫を憂慮したウィリアム・モリスは、「美しい書物」の復興を決意し、「中世の彩飾写本」や「初期印刷本」を範として、「装飾への愛着」や「美しいものによって美と適切さを表現する感覚作用」の重要性を説いている。また、20世紀当初のバウハウスにおいては、反装飾芸術の見地から機械時代の「新しい書物芸術」の出現が要請され、タイポグラフィーが機能的に把握されて、明確さと読み易さを最優先させながら、写真が進んで取り込まれて新しいタイポグラフィー言語の創出が企てられている。そして今日では、急激な技術革新による電子化は、書物と装飾の在り様を根本から大きく揺さぶっている。そこで本共同研究は、こうした書物と装飾芸術の関係について、本学図書館所蔵の「西欧中世写本ファクシミリ」、「ケルムスコット・プレス刊本コレクション」、「日本近世の絵手本」などの関連資料を中心にして、文芸、美術、デザイン、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に調査研究するとともに、その芸術文化史的な意味を理論と制作の双方から総合的に考察し、その成果を現代そして未来の書物創造のエネルギー源として組み込み、書物と装飾の関係の可能性を探ることを目的とする。

そのため、本共同研究は3年計画とし、3年度にあたる平成24年度は、学内外の共同研究者からなる研究会を組織し、次のような見地から研究をさらにより一層推進した。

【A】本文（テキスト）について……書物のすぐれた精神性

【B】本文の装飾や器としての書物について……書物の美しい物質性

それぞれに対しての1) 歴史的なアプローチ、2) 文化面からのアプローチ、3) 創造性の観点によるアプローチ、を複合的に試みた。

1) については、中世の写本や近代の絵手本を取り上げて、「テキストと装飾」はどのように関連付けられて造形されたかを問うとともに、【A】信頼すべきテキストの成立を目指すための校正、校閲、索引の役割までなどをさらに問うた。

2) については、グーテンベルク以降、複製技術による書物がどのように文化を先導したか、

大量消費、マス・メディアの時代において本の装飾とは何か、を問うとともに、書物の復権について論議を深めた。

また、【B】の観点からは「高貴な意図」としてデザイン・装本の問題が浮かんでくる。ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレス刊本とその後続くプライベート・プレス刊本を新たな視座から問うことをより推進した。

3) については、美しい書物の成立に関わる根本問題を 21 世紀の今日的な視座から考察を深めた。

テーマは多岐に亘り、とりあえずは試み、問題提起のための研究ではあるが、文芸学科のみならず、本学デザイン学科等の他学科の関連講座担当者との連携、また学外研究員の協力を得て研究会やシンポジウムを開催し、各自のテーマについて報告し論議をさらに掘り深めた。また、昨年に購入した小型の活版印刷機（蝶番式プラテン小型活版印刷機「Adana-21J」）に関して、その周辺機材を購入し、〈「蝶番式プラテン小型印刷機 Adana-21J」の使用に必要な操作方法の基礎〉についてのワークショップ（平成 24 年 10 月 12 日、文芸学科 長谷川研究室）を開催し、揺籃期本時代の活字活版印刷に立ち返って、活字を手で組んでいくというプロセスを検証し、文字と組版という美しい書物の成立に関わる根本問題を今日的な視座から掘り起こすことを推進した。

その間を活用して本研究成果の一端を、平成 24 年度大阪芸術大学所蔵品展『ケルムスコット・プレスと絵入芸術雑誌一世紀末における美しい書物の連鎖―』（大阪芸術大学博物館、2014 年 10 月 16 日（火）～11 月 4 日）において展示するとともに、さらにはシンポジウム「書物の復権」（大阪芸術大学ほたるまちキャンパス、平成 25 年 2 月 17 日）において報告した。

そして本年度の研究成果に関して、以下の個別研究テーマに基づいて、研究報告書を作成した。

- 1、長谷川郁夫 ・書物と装飾芸術
- 2、山縣 熙 ・書物と装飾芸術の原理論
- 3、籾 亨 ・ヴィクトリア朝における書物と装飾
- 4、田中 敏雄 ・書物と装飾と近世における画譜との関係
- 5、豊原 正智 ・書物と装飾の映画との関係
- 6、出口 逸平 ・書物と装飾の戯曲との関係
- 7、高麗 隆彦 ・装丁の現在
- 8、瀧本 雅志 ・書物装飾と表象文化
- 9、福江 泰太 ・書物と装飾に関する編集者の視座からの書誌学的研究

以上

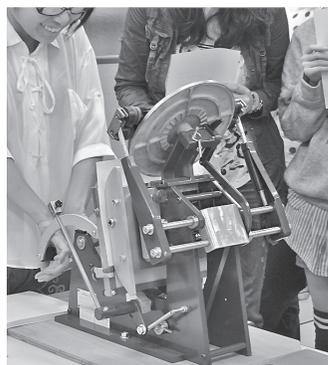
ワークショップ

「蝶番式プラテン小型印刷機 Adana-21J」の使用に必要な 操作方法の基礎」

開催日 平成 24 年 10 月 12 日（金曜日）午後 4 時 30 分～ 6 時

場 所 大阪芸術大学文芸学科 長谷川研究室（22 号館 606 〈2〉 出版・編集研究室）

「蝶番式プラテン小型印刷機 Adana-21J」の使用に必要な操作方法の基礎」についてのワークショップを、福江泰太氏（文芸学科非常勤講師）の指導の下に、開催した。本印刷機は、手動式の卓上活版印刷機であり、名刺、カード、はがきなど、小型の端物印刷物に適している。金属活字や木活字のみならず、亜鉛や銅やの樹脂などの凸版など、さまざまな凸状印刷版を用いて印刷が可能である。



シンポジウム「書物の復権」

日時 平成24年2月17日(日曜日)午後3時～5時

会場 大阪芸術大学 ほたるまちキャンパス【堂島リバーフォーラム】

書物の復権について、文芸、グラフィック・デザイン、美術、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に見渡し、その芸術文化史的な意味を制作と理論の双方から総合的に考察し、書物の復権の様相とその未来を探った。

シンポジウム
書物の復権

書物の復権について、文芸、グラフィック・デザイン、美術、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に見渡し、その芸術文化史的な意味を制作と理論の双方から総合的に考察し、書物の復権の様相とその未来を探った。

平成25年 2月17日(日)
午後3時～5時

大阪芸術大学
ほたるまちキャンパス
堂島リバーフォーラム内
〒563-0003
大阪市福島区福島 1-1-12
TEL 06-6450-1515

総企画 長谷川郁夫 大阪芸術大学文学部教授
実行委員会 長谷川郁夫 大阪芸術大学文学部教授
パネラー 山崎照一 大阪芸術大学文学部教授
司会 山崎照一 大阪芸術大学文学部教授
出陣総務 大塚三郎 大阪芸術大学文学部教授
連絡担当 大塚三郎 大阪芸術大学文学部教授
責任編集 岡山理科大学デザイン学部長 長谷川郁夫
平成23年度大阪芸術大学芸術研究所
研究調査補助員「書物と装飾」
研究会代表 長谷川郁夫

大阪芸術大学図書館所蔵品展
バウハウス叢書 (第1巻～第14巻) —カバー・デザインを中心にして—

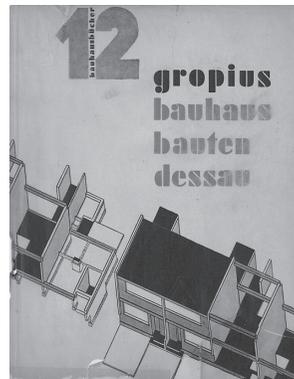
期間 平成24年7月10日～8月10日

会場 芸術情報センター4階展示コーナー

バウハウス叢書は、1920年代後半にバウハウスの指導者グロピウスと最年少の教師モホリ=ナギとの共同編集によって創刊されている。当時バウハウスは、初期の「表現主義的な時期(1919-1923)」の超越的な総合観の超克に努めており、その方策の一環として企画されたのが当バウハウス叢書である。当初の計画では、近代的な生活のすべてを包含する新しい総合の理念の基礎がためを目指して、芸術、科学そして技術の諸問題を広く取り上げることになっていた。しかし実際に刊行されたのは造形芸術をめぐる総計14巻にとどまり、建築、美術、デザイン、映像芸術そして舞台芸術の新しい理論とその成果が多面的に収録されており、バウハウスの「フォルマリスム的な時期(1922-25年)」から「機能主義的な時期(1925-27年)」にかけての基本的な造形理念や多様な活動の所産が網羅されている。

当叢書の全体デザインは、モホリ=ナギが手掛けており、その体裁は黄色のクロス装で統一され、装丁デザインは極めて機能的で簡潔であり、水平垂直の軸線、Bauhausという文字、叢書番号と表題、これらがデザイン要素のすべてである。さらに表題紙のデザインにおいては、力強い肉太文字と水平軸線によるテキスト分割が紙面に明確さと均整を与え、独自の視覚的効果を上げている。この極めて構成主義的な枠組みによって統一されたバウハウス叢書の体裁とタイポグラフィは、バウハウスの視覚的イメージを速やかに刷新して行くのであった。

また当叢書のカバー・デザインは、モホリ=ナギが9点の多くを手掛けているが、バウハウス関係者のファルカス・モルナール、アドルフ・マイヤー、オスカー・シュレンマー、ヘルベルト・バイヤー、さらにはデ・ステールの指導者テオ・ファン・ドウスブルフが、それぞれ1点ずつ手掛けている。



雑誌名：Bauhausbücher, Band 1～Band 14
編集：Walter Gropius und Laszlo Moholy-Nagy.
出版者：Albert Langen-Verlag München
発行年：1925-1930.

大阪芸術大学所蔵品展
『ケルムスコット・プレスと絵入芸術雑誌—世紀末における
美しい書物の連鎖—』

期間：平成 24 年 10 月 16 日（火）～ 11 月 4 日（日）

会場：大阪芸術大学博物館 地下展示場

ウィリアム・モリス (William Morris, 1843-96) は、ヴィクトリア朝時代の詩人、工芸家・デザイナーとして名を成すとともに、晩年になって「ささやかな印刷術の冒険」に乗り出している。モリスの願いは、書物というものが、美しい活字で美しい紙に印刷され、美しい装丁で製本されうるのを証明することであり、すべての本は「美しい物」であるべきだというのが彼の信念であった。そこでモリスは、手引き印刷機を購入し、印刷職人を雇い、最良の手漉き紙と印刷用インクを探しだし、ハマースミスに「ケルムスコット・プレス (Kelmscott Press, 1891-98)」を創設している。そしてこの私家版印刷工房から、『ジェフリー・チャーサー作品集』を頂点とする全 53 書目、66 冊の美しい書物が刊行されている。

今回の展示では、このケルムスコット・プレス刊本に含まれる 3 書目（『世界のかなたの森』、『ガレスのパーシヴァル卿』、『聖処女マリア賛歌』）が展示されており、いずれも書物装飾家としてのモリスの真骨頂がよく発揮されている。さらには、「美しい書物造り」への情熱においてケルムスコット・プレス



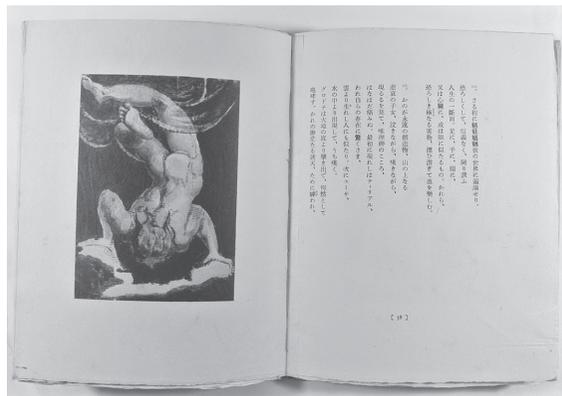
刊本と何らかのつながりを有する、世紀末の絵入り芸術雑誌 6 書目が展示されている。ことに、『センチュリー・ギルド・ホビー・ホース (Century Guild Hobby Horse, 1884, 1886-92)』は、商業主義的な出版方式の悪影響に反対し、書き手と読み手に直接結び付いた理想の本造りを目指しており、モリスの「ケルムスコット・プレス」の出現を大いに刺激している。また、『パン (Pan, 1895-1900)』や『ウェール・サクラム (Ver Sacrum, 1898-1903)』などは、モリスの「ケルムスコット・プレス刊本」を優れた手本として、タイポグラフィーはもとより装飾図案やイラストレーションから装丁にいたるまでの全体デザインに力を入れている。これらの絵入り芸術雑誌は、「ケルムスコット・プレス」を仰ぎながら当代の印刷芸術再興の運動を盛り上げたのである。

書物芸術関係資料

キリヤム・ブレイク作 『唯理神之書』

寿岳文章訳

京都 向日庵私版 一九三二年



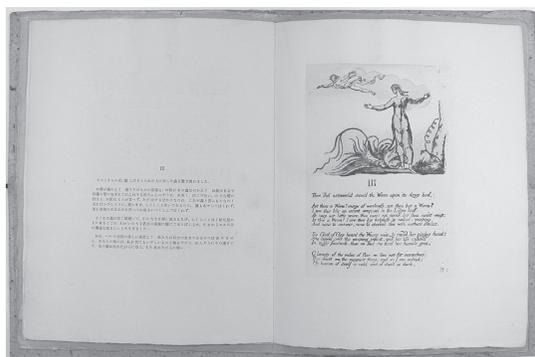
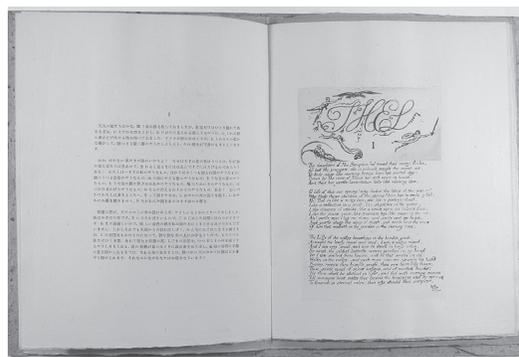
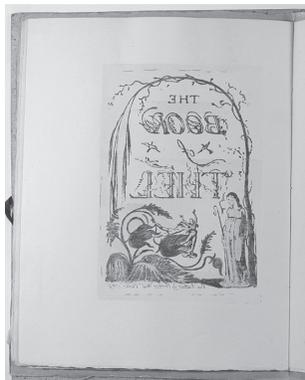
「書物と装飾」(3)

書物芸術関係資料

複製 キリヤム・ブレイク 『セルの書』

訳詩 寿岳文章

京都 向日庵私版 一九三三年

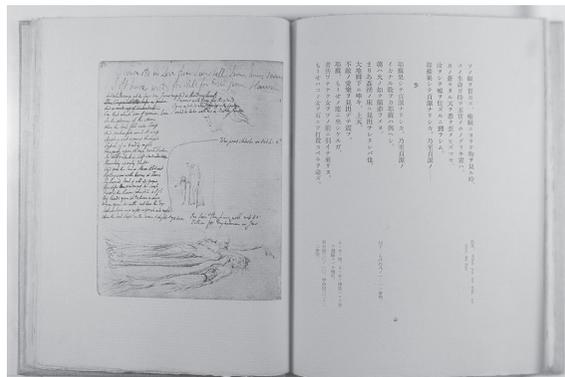
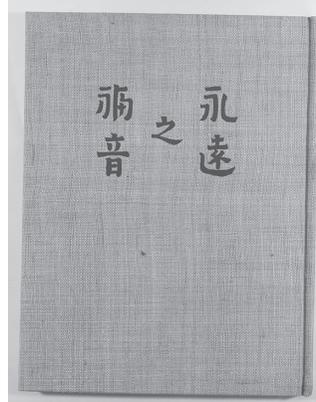
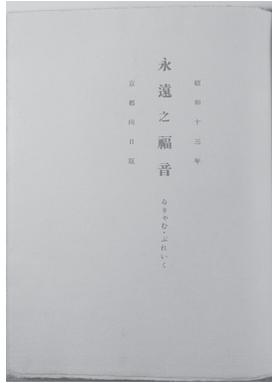


書物芸術関係資料

キリヤム・ブレイク 『永遠之福音』

訳者兼発行者 寿岳文章

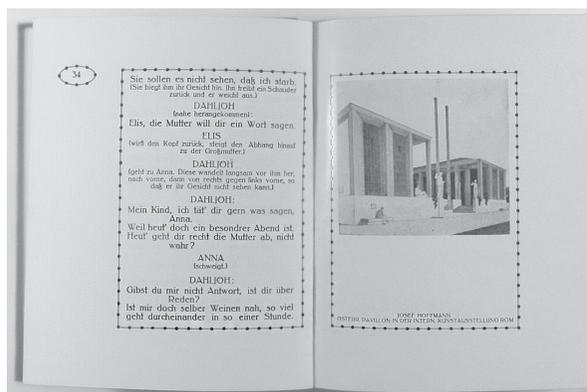
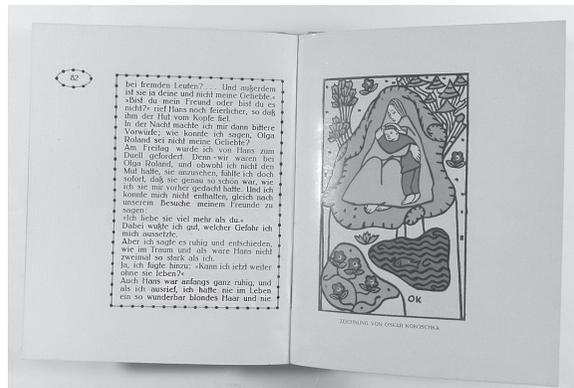
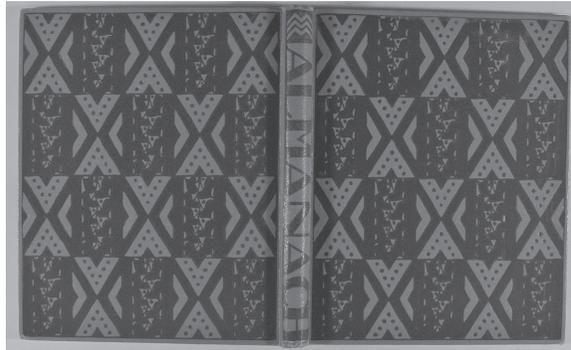
京都 向日版 一九三八年



Almanach der Wiener Werkstätte

Verlag Bruder Rosenbaum Wien Leipzig

(1911)



書物デザイン関係資料

The Poster. An Illustrated Monthly Chronicle

Part 1: Volumes 1-3 (June 1898-February 1900)

(This edition published in 2012 by Athena Press, Japan)

